



「虚飾の時代」 1991年CAF展出品

現代の偽りの繁栄を、分かり易い題名で描いている。内面の動きなどを筆触に託すことに興味はあるが、誰でも描くようにはなりたくないなので、形にこだわっている。自分らしい形は、どうやらアイヌか縄文土器などに近い線らしい。 -図録コメントより-



「時の表装 導火線」 2003年モダンアート展



シリーズ「裂傷」 2004年モダンアート展遺作展示

## 第10回展までの経過など

現代美術の祭典  
実行委員会事務局長 高木 康夫

現代美術の祭典は、今年でついに10回展を終えることができた。10年前埼玉会館で旗揚げの展覧会を開催したのは、折しも地方文化の見直しが叫ばれている頃であった。埼玉が地方であるか否かは別として、文化の面では地方的状況が色濃く感じられていたと云ってよい。

「埼玉に新しい芸術の流れを」と熱っぽく説いた五月女幸雄氏は、詩人の秋谷豊氏を初代の会長に押しして“埼玉・新しい芸術の会”を発足させた。当時の新聞は〈県展への反逆・芸術の祭典開催〉というかたちで一斉に報道した。

10年を経過して、そうした文化的状況が変化したか否かは疑問であるが、周囲に対し絶えずある緊張感を強いてきたと云ってよいであろう。第6回展より事務局長を引き継いだ私は多数の同志とともにもうつぶれるだろうという噂を耳にしながら、持論であったコンクールの拡大と充実を計り、経済的な基盤と運営力の安定強化の実現に努力した。そして2代目の会長に当時の埼玉大学長の須甲鉄也氏をお迎えすることができ、第6回展からは竣工なった埼玉県立近代美術館を会場とすることができたのは、祭典にとって幸せなことであった。当然のことながら、そして最初からそうであったように目標は対県展というようなものでなく、現代美術の高揚という方向に向かっていった。

現代美術の祭典の特色は、何の規制もなく自由に集まる作家が手作りで新聞社や美術館の企画なみのコンクール及び展覧会を運営することにある。そのためには、企画の難しさもさることながら、実に数多くの労働力と私費をつぎ込むことが必要となり、さながらボランティア活動の様な心情を集結させる感じすらするのである。しかし全国から若い魅力のある作家が集まり、運営してゆく側のメンバーも常に入れ替わり、新しい力を吸収しながら年々発展して、公開審査・講演会・アートフォーラム・パフォーマンスなど開放感のある運営を続けてきている。

そして、そうした発展の大きな力となったのは、長年にわたり好意を持って審査員を引き受けて盡力してきて下さった瀬木慎一、ヨシダヨシエ、林紀一郎、三木多聞、大島清次それに本間正義（順不同）の各先生方のお力によるものと深く感謝している。

第6回より実現できた野外彫刻展は、近代美術館前の北浦和公園を貴重な彫刻の展示空間とすることになった。そして第10回からはさらに改善して、意欲的な25作家による様々な実験的な立体造形の作品が展示された。

然しながら、回を重ね発展を繰り返しながら問題点もまたより多く鮮明になってきたようである。第10回は全員のアンケートにより、新しい風を入れようとし、いくつかの改革を行ったが果して成功であったか、そして祭典は10年間で何を残してきたか、またどう動いていくべきなのか、自らに問い社会に問うていくことはますます多いのである。

終りに、文化基金による補助金を出して下さった県当局に感謝申し上げるとともに常に外部からの視点で助言して下さった金澤毅先生をはじめとして、長い年月の間に協力していただいた多数の方々にお礼を申し上げたい。

[1987年、第10回記念 現代美術の祭典 作品集より転載]

1930 埼玉県生まれ、東京芸術大学卒

1955～1970 読売アンデパンダン展、全日本アンデパンダン展、二科展、日本今日の美術展、ルナミ画廊選抜展、アート倶楽部版画展、国際青年美術家展、アメリカ・ヨーロッパ歴訪、個展3回

1963 第5回埼玉前衛芸術展に参加（以後毎回）

1971～1982 モダンアート協会展（1978年会員推挙）、無・名展、ヌーベルアートギャラリー企画展、開かれた美術館展、東京展、現代日本美術展、日仏現代美術展、埼玉美術の祭典、個展12回

1978 五月女幸雄氏と共に「埼玉美術の祭典」立ち上げに参加する。第6回展より事務局長として2003年まで運営の中心となる。

2004.1 逝去